

目指す学校像	笑顔のあふれる学校(あいさつ・返事、学習、清掃)づくりをめざし、学校教育目標「生き生きした 活力のある子」の育成を実現する。
--------	--

重点目標	1 教科担任制導入による授業改善とさいたま市「アクティブ・ラーニング」型授業の充実 2 大牧小GIGAプロジェクトの一層の推進と安全・安心な感染防止対策 3 コミュニティ・スクールの推進 4 さいたまSTEAMS教育及びさいたまSDGs教育の推進による指導力向上
------	--

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価		学 校 自 己 評 価		学 校 自 己 評 価		学 校 自 己 評 価	
年 度 目 標		年 度 目 標		年 度 目 標		年 度 目 標	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	(現状) ○全国学力・学習状況調査における平均正答率は全国との比較で、微弱ではあるがそれぞれ上回り良好な結果である。国語科の無解答率が全国平均より上回り、「書くこと」の正答率が全国平均より下回った。	・教科担任制導入による授業改善 ・さいたま市「アクティブ・ラーニング」型授業による学びの自律の充実	①高学年において学年を跨ぎ、算数・理科・社会・音楽・図工・体育・家庭・GSの8教科で教科担任を配置し、授業実践する。 ②8名の教員が児童一人ひとりについて児童理解を図り、情報を共有することで児童の可能性を一層引き出す。	①高学年8教科の教科担任授業を確実に実施する。 ②高学年8教科の教科担任授業に関して児童アンケートをとり、授業の充実度について肯定的回答を8割以上とする。	①高学年担任5名で合議により、担当教科を割り振った時間割を作成し、年間指導計画や年間行事計画に基づいて確実に実施することができた。 ②7月19日、12月19日の2回、児童アンケートを実施し、「授業が分かりやすくなった」への肯定的回答が88.7%であった。	A	学年ごとの行事に取組む際、学年を跨ぐ指導体制は非常に調整が難しく、学級担任が受け持つ「国語」が大きく影響を受け授業の進捗に課題が見られた。行事自体や行事の計画を前年度中にしっかりと調整しておく必要がある。
	(課題) ○粘り強く学習課題に向き合うこと、思いや考えを文章に書き表す力に弱さがある。 ○自ら課題をみつけ、自ら探究してこうという意識・意欲が十分に身に付いていない児童がやや多くみられる。		①6つの指導プロセスに基づいた学習場面を展開し、児童の自発的な気づきや追究・探究を促す。 ②各教科の授業で、自分の目標や感想等の振り返りなどについて、「書く活動」の充実を図る。	①各教科、各単元で、自発的な意思決定場面や「文章を書く活動」の実践を図り、適切に評価する。 ②毎週1回実施する学年会で、児童理解や学習状況について情報共有を図る。	①順序立て、筋道を立て、自分の思いや考えを表現することについて、あらゆる場面で書く活動として取り組んだ。 ②毎週火曜日の放課後をはじめ、その都度細やかに情報の共有を進め、児童理解、保護者連携を図った。		
2	(現状) ○大牧小GIGAプロジェクトとして、児童一人1台端末の学習活用を全教員が積極的に進め、新型コロナの影響により登校できない児童が自宅でオンライン学習に取組む体制を整えることもできた。 ○感染拡大防止策として、風邪様症状発症の児童が待機するため第2保健室の設置と、保護者の安全な迎えルートを確保することができた。	・誰一人取り残さない学習体制の確保 ・感染症拡大防止に係る体制や対応の工夫	①既存のタブレット、マイクやステイプリアによるオンライン学習サービスを活用し、児童の自発的な学習に生かす。 ②学校、自宅のいずれの場にも居ても、学びを止めず、探究的な学びやドリル的な学びを実現できるようにする。 ③授業参観でタブレット活用学習を保護者に公開し、取組の理解を図る。 ④タブレット持ち帰りによる学習活用を学年、学級の実態に応じて行う。	①全学年、全教科でのタブレット活用を実現する。 ②探究的な学び、ドリル的な学びによる児童の課題解決的なタブレット活用を図る。 ③年間3回の授業参観の機会を設け、それぞれの授業でタブレット活用場面を取り入れ、保護者理解に取組む。 ④児童の実態に応じて持ち帰りを計画的に実行する。	①タブレット活用は各学年において順調に進めることができた。3～6年では、各種アプリやソフトが機能、ステイプリアなど、活用の幅を広げることができた。低学年については、国語や算数での活用を進めることができた。 ②2学期以降、タブレットの持ち帰りや家庭所有PCの活用を進め、オンライン学習の実践に取り組んだ。低学年については、端末の操作や管理の指導が十分に行き渡らず、校内での活用を中心に行った。	B	ICT活用、特に児童用タブレットや新たに教室設置したプロジェクタは使用頻度や効果的活用が大きく進んだ。今後はより一層、利活用術に関する校内研修を充実させ、教員によって温度差が生じないように取組みを前へ進める。ステイプリアは教材にいくつか課題があり順調には進んでいない。業者と調整を着実に進めていく。
	(課題) ○低学年児童のタブレット活用をさらに推進し、持ち帰りによるオンライン学習の実績を積み必要がある。 ○個人情報保護を確保しつつ、学級閉鎖等の情報の出し方について、より保護者に安心できる内容で発信していく必要がある。		①非接触型対応として、発熱発症児童の病床の確保、対面配置の学習機のタブレットを設置する。 ②学校安心メールによる学級閉鎖のお知らせ等、個人情報への配慮を含む情報発信を行う。	①臨時のベッド2床を常設する。 ②予備の簡易ベッド7床を確保する。 ③図書室、図工室、家庭科室にタブレットを設置し、予備タブレット20枚の購入。 ④その都度、スポット感と分かりやすい表現のメール配信を行う。	①臨時のベッドを2床、会議室に常設した。 ②予備のベッドを8床、購入し確保した。 ③図書室、図工室、家庭科室にタブレットを常設し、予備20枚を購入、確保した。 ④学級閉鎖の情報を保護者の要望により全家庭に配信し、不安感を払拭した。		
3	(現状) ○昨年度、コミュニティ・スクール準備校の指定を受け、学校運営協議会準備委員会を立ち上げ、委員会を2回実施した。学校経営方針の承認、委員長の選出、コミュニティ・スクールについての理解を図り、熟議を経験していただき、令和4年度への方向性を探ることができた。	・熟議による目標の設定と成果 ・コミュニティ・スクールとSSNの一体的推進	①計画的に委員会を開催し、熟議の進行・説明を丁寧に行い、当事者意識をもって目標を設定できるようにする。 ②経過報告と成果・課題について資料を整え、熟議の方向性を見失わないよう協議会の準備と整理を行う。	①第1回協議会の熟議で、目標および関係団体・機関との協働内容を決定する。 ②第2、3回協議会で、関係団体・機関の取組状況を確認し合い、進捗・成果・改善点について熟議する。	①「登下校の安全」について、通学路の巡回と確認、全校児童による防犯ボランティアの認知、危険個所の共有、自治会のかかわり方などが熟議内容として出された。 ②学校ファームの維持・管理について、保護者や地域協力者、チャレンジ・スクール、児童委員会活動による耕作や草取りを計画した。	B	学校サイトから熟議テーマに「安全」と「学校ファーム」を例示した。コロナ禍であったことから、関係団体の役割に制限があった。より一層コミュニティ・スクールの在り方の理解を図り、自分事として何ができるか、大牧小としてどのような子どもの姿を追究していくか、議論していく
	(課題) ○今年度は、コミュニティ・スクールとして本格実施となる。改めて学校と地域、保護者が協働し、学校運営に参画するための熟議を重ね、明確な目標を掲げ、実績・成果を創っていく。 ○SSNとの関係性、役割を明確にし、コミュニティ・スクールの在り方に対する理解を、教職員、地域、保護者が一層深めていく。		①学校運営協議会の熟議内容をSSNに降ろし、SSNの構成組織団体で担える側面を協議し、役割分担を構造化して、協働の実績・成果を見出す。 ②学校だけでなく、学校HP、学校運営協議会だより等を通じて積極的に情報発信し、経過や成果について共有する。	①SSNを年間2回開催し、運営協議会の協働内容を関係団体・機関ごとに割り振る。 ②割り振った協働内容について、関係団体・機関が取組を進め、成果を見出す。	①防犯ボランティア、110番の家、子ども会、PTAが、児童の見守りや危険個所の把握を、自治会が関係機関(緑区役所、警察等)への働きかけを担当した。 ②歩道へ新たな車両止めポールが設置された。薄くなった道路標示が上書きペイントされた。 ③畑の草取り、耕作、花畑づくり、野菜づくりが計画的に進んだ。		
4	(現状) ○STEAMS教育における、実社会につながる問題発見や課題解決能力の育成、「STEAMS TIME」に関する理解やカリキュラム開発は今年度から積み上げていく領域である。 ○SDGs教育は人権の花運動、総合的な学習の時間、学校ファーム(たっぴー畑)と関連付け、人権教育及び環境教育の側面から実践を重ねることができた。	・さいたまSTEAMS教育の推進 ・さいたまSDGs教育の充実	①カリキュラムに位置付けた「STEAMS TIME」の実施により、プログラミング的思考や創造性を育む学習過程(PBL)を取り入れた授業実践に取り組む。 ②校内研修組織を活用し、教科横断的な視点に立った資質・能力の育成の研究に取り組む。	①3年生以上、「STEAMS TIME」の年間9時間以上の授業を実践する。 ②プログラミング的思考を育むプログラミング教材を活用する。 ③経験年数に応じた研究グループによるメタ・メタ形式をベースとした授業の見せ合いを通年で行う。	①「STEAMS TIME」は、2～3学期に、3年生以上の学級で9時間実施した。 ②プログラミング教材 Mesh を活用し、プログラミング的思考を育む「STEAMS TIME」を実践した。 ③学期ごとにメタ・メタ形式による授業公開を教員間で行い、業後は管理職を含めた分科会をその都度行い指導力向上を図った。	B	各学年の取組や成果の検証を進め、本市がめざすSTEAMS教育の目標に近づこう、実践を積み重ねていく。市教委が主催する研修会に積極的に参加したり、他校の事例を参考にしたりしながら、本校独自のカリキュラムを構築していく。
	(課題) ○「教え方が上手な教師」から「学ばせ方の上手な教師」への転換を図る必要がある。 ○子どもの気づきや興味・関心を、幅広い教科横断的な取組に向かわせる視野と指導力を育成する必要がある。		①児童会が主体となり、全校児童で取組む活動(ごみ拾い運動、あいさつ運動等)を推進する。 ②毎学期、管理職による45分間授業観察を行い、「学ばせ方の上手な教師」の育成を図る。	①児童一人ひとりが「持続可能な開発目標」を自分事として捉えられたかに関するアンケートに対して肯定的回答80% ②学期ごとに、全教員への45分授業観察を行い、その都度、「学ばせ方の上手な学ばせ方」の視点から指導・助言を行う。	①児童会を主体とし、各学級へ取組みの投げかけを行った。ペットボトルキャップを再利用して掲示物を作成したり、ゲーム集会(たっぴーカーン)で学級ごとのゲームナーでごみを出さない取組みを実践したりした。 ②各学期、管理職による45分授業観察を全教員に行い、指導の上、授業力向上を図った。		

学校運営協議会による評価	実施日 令和5年1月31日
学校運営協議会からの意見・要望・評価等	

・複数の教職員が携わることで子どもたちの可能性が広がっていきとてもよい取組みになっている。
 ・児童の肯定的回答が9割に達すれば達成度は十分Aとし得るが、ほぼ達成という意味でAでよいのではないか。
 ・学習状況調査が市の平均を上回っていることは大変喜ばしい。教職員の努力を感じる。今後ますます児童の学力向上に尽力してほしい。

・タブレットの活用は学年・学級・担任によって偏りがあるとの話を耳にした。課題をクリアしながらもっと積極的に活用してもらいたい。同時にSNSに対する指導の強化を望む。
 ・タブレットの活用により、急に欠席する児童もオンライン授業に参加し学びを止めずに履修できたことがよかった。
 ・発熱者の隔離、送迎ルートの確保、情報発信内容の変更等、感染症対策に関してしっかりと取り組んでいただけだと感じている。

・コロナ禍ということもあり、保護者が参画できる場面がかなり少なくなると感じている。来年度以降、積極的に情報を発信し、保護者が参画できる場面が増え、保護者の理解が進むことを期待する。
 ・保護者の役割を明確化し、PTA活動の内容の見直しが必要であると感じている。
 ・熟議は抽象的な目標からのスタートと、具体的な取組内容を設定してからのスタートがあるだろう。

・保護者らに「STEAMS TIME」が何か、しっかり伝わっていない。より一層、積極的に周知してほしい。
 ・学校ファームや自然環境のよさを生かし、児童が「自分で考える力」を身に付けられるよう、今後も野外活動に力を入れてもらいたい。
 ・「STEAMS TIME」について、今年度スタートさせた新たなカリキュラムのことで、今後、一歩ずつブラッシュアップし、課題の解決に向けてほしい。